

第7 2回日本PTA全国研究大会（川崎）の報告

今回初めて岩松中学校PTA会長として参加させて頂きました。

毎年1日目はテーマ別で各場所に分かれて分科会を行い、2日目は一つの会場で行っていたそうですが、今年の川崎大会では2日間とも一つの会場でステージを囲みながら行いました。（ボクシングやプロレスのリングの様な感じです）参加者もまとまって座ることのないように各県に色分けされた4色のリストバンドをして、その色分けをした人同士が一つのグループを作ってセッションを行うように今年は工夫されていた大会だと思いました。

まず、スローガンである「ウェルビーイングの実現を川崎の地から」について、ウェルビーイングとは何かを最初に調べました。

世界保健機構（WHO）では、ウェルビーイングのことを「個人や社会のよい状態。健康と同じように日常生活の一要素であり、社会的、経済的、環境的な状況によって決定される」と紹介されています。

ウェルビーイングには「主観的ウェルビーイング」と「客観的ウェルビーイング」の2種類があり「主観的ウェルビーイング」とは、一人ひとりが自分自身で感じる認識や感覚によって見えてくるものです。それを測る指標として、「人生への幸福感や満足感」「生活への自己評価」「うれしい、楽しいなどの感情」などが挙げられるでしょう。例えば、「自分にとってよい人生とは？」「自分は今どんなきもちだろうか？」と自分自身に問いかけることも、主観的ウェルビーイングを把握するために有効です。「よい状態かどうか」の感じ方は一人ひとり異なります。

一方で、「客観的ウェルビーイング」とは、客観的な数値基準で把握できます。例えば、平均寿命や生涯賃金、失業率、GDP（国内総生産）、大学進学率、収入に占める家賃の割合、労働時間や有休取得率、人と関わる時間、保育所待機児童数、育児休業取得者数、介護時間など、統計データで測れるものです。これらの統計データは、国別や県別などウェルビーイングの充実度を比較するときに利用されることがあるそうです。

今回の講師の中で特に西野博之氏の講演が心に響いたのでココに載せます。

小学校1年生の男の子が入学1カ月で学校に行こうとするとお腹が痛くなると言い、無理していくようになり玄関先で倒れてしまった。その時に涙を流して「1段目でつまずいてしまった、もう大人になれない」、そして当時は登校拒否になってしまった子がいたそうです。その子たちの居場所を作るために「認定NPO法人フリースペースたまりば」を1991年川崎市高津区の多摩川のほとりのアパートに作ったそうです。

いま、不登校が増え続けて、その数は約30万人だそうです。中学生の17人に1人が不登校。その背景に「いじめ」があるとの事ですが、文部省は0.3%がいじめの不登校だと言っています。いじめのピークは何年生ぐらいからだと言われ、自分は5年生ぐらいかなと

思っていました、実際は小学校2年生がピークだそうです。

そんな小さな子供がストレスをためているのは、私たち大人がそんな社会を作っているのだと西野氏は言っています。

そして現在少子化の中で子供の自殺だけが増え続けているそうです。10歳(小学4年生)から39歳までの死亡原因が自殺だそうです。去年1年間だけで514人の子供がなくなっています。毎日1人以上の子供が自殺しています。

日本の子どもは自分のことを「だめだ」「ばかだ」と語り自己否定感が低いと言っています。その原因は大人たちの不安が関係しているのではないかと考えたそうです。「子どもに失敗させたらかわいそう」「わたしの子育て、このままでいいの?」「正しい親に見られたい」と子どもが親たちの評価をして、その結果が結びついているのではないかと、親は正しさ、完璧を求めすぎてしまう。「これぐらいできてあたりまえでしょ」「なんでこんなことができないの」正しさが充満して、子どもは弱音を吐けません。

話の中で挙げられていた「船戸結愛ちゃん事件」ですが、わずか5歳の結愛ちゃんが毎朝4時に起こされて言われるわけです。「勉強しろ。しっかりひらがなぐらい書け。こんな計算ができないでどうする」逃げ場なんてありません。そして、結愛ちゃんはひらがな練習帳に、こんなに見事な日本語の文章を書き残して命を落としたそうです。

ママ。もうパパとママにいわれなくてもしっかりと きょうよりか もっともっとあしたはできるようにするから もうおねがいゆるして ゆるしてください おねがいますほんとうにもうおなじことしません ゆるして きのう ぜんぜんできてなかったこと これまでまいにちやってきたことをなおす これまでどれだけあほみたいにあそんだか あそぶってあほみたいだからやめるので もうぜったい ぜったい やらないからね

5歳の女の子が、「遊ぶってアホみたいだからやめる」と言って死んでいく。どれだけ親から言われてきたかがわかります。こんな社会を私たちはつくり出してしまっているわけです。現代は「やってみたい」よりも「やらなければならない」ことが優先される社会「おい、今日は塾だぞ」「英語教室だ。その後は水泳教室」、大人が子どもの時間をすべて切り刻んでいます。本来、子どもにとって「遊ぶ」というのは「生きることそのもの」です。いま注目されている非認知能力も「遊び」から育まれます。非認知能力とは、テストの点数や偏差値など「数値」で表すことができる認知能力に対して、数値で表すことのできない能力を言います。たとえば、好奇心やコミュニケーション能力、考える力、困難から立ち上がる力などです。予測不能なこれからの社会、自分で深めて考えていく力が必要だからなおさらこの「非認知能力」が注目されているそうです。

西野氏は子どもを「大丈夫」に包んであげればよいと言います。

発達障がいの考え方も問い直したほうがいい。多動が問題児と言われています。しかし和私たちには多動の DNA が身体の内側に埋め込まれていて、何百万年もの歴史のなかで人類は外敵から身を守るため、「多動」で生き残ってきました。それにも関わらず、6 歳になった途端、教室に入れられ「はい、手はおひざ。動いちゃダメ。おうちチャック。先生を見て、黒板を見て」と 45 分授業を 5 時間とか言われるわけです。走りまわる子は、困った子じゃなくて、困っている子なんですよね。むしろ、ひとりひとりの子どものありように適応できていない学校教育側の課題と考えた方がいいのではないのでしょうか。

私たちは「障がいは身体の内側ではなく、外側にある」という考え方を取り入れています。「医学モデル」ではなく「社会モデル」。このひとを治そうじゃなくて、社会や環境のほうを変えていこうというまなざしで活動しているそうです。

子どもは安心できる居場所のなかで「大丈夫」に包まれると、自然と意欲がわいて自分の頭で考えて、自分の足で歩き出します。だから私たちは「大丈夫」を伝えるだけでいいと言います。親にできることは、「くう・ねる・だす」に気を配ること。これだけです。「食べられているか。寝れているか。うんちが出るか」これ以上のことまで親がやろうとすると、子どもとの関係がうまくいなくなるのです。子どもたちの育ちに必要なのは、「安心・安全でいられる楽しい場と人間関係」あとは「まわりにいる大人たちの子どもを見守る肯定的な眼差し」だそうです。

最後に西村氏は、大人が幸せにいてください。大人が幸せじゃないのに、子どもだけ幸せにはなれません。大人が幸せでないと、子どもに虐待とか体罰が起きます。条例に「子どもは愛情を持って生まれる」とありますが、まず家庭や学校、地域のなかで大人が幸せでいてほしいのです。子どもはそういうなかで、安心して生きることができます。

そう説明して西村氏の講演は終わりました。

今回の西村氏の講演を聞いて、この講演をすべての親に聞いてもらえるようになれば、不登校の子どもや自殺する子どもが減るのではないかと思いました。そして今回川崎大会に参加して色々な方の講演を聞きすごく為になりました。私はこれから子供達の生活を守るためにいろんな人の意見を取り入れ、今後の活動に繋げられるようにしたいのと、今回参加出来なかった方も機会があれば来年度の全国大会（石川大会）に参加して講演を聞き、PTA をやるうえでの糧に出来たらと思います。